# サークル文化運動と部落民の表現 ―土方鉄を中心に―

後藤田　和

## 一　はじめに

昨今、一九五〇年代のサークル文化運動の研究が盛んに議論され、多くの研究分野による蓄積がなされている。その発端となったのは、二〇〇七年一二月に刊行された『現代思想』誌臨時増刊号「戦後民衆精神史」で、道場親信らにより、東京南部のサークル文化運動が取り上げられたことである。その翌年には「戦後文化運動合同研究会」が発足し、一〇年間の研究会の到達点として、二〇一六年一二月『「サークルの時代」を読む　戦後文化運動研究への招待』が刊行された。前述した道場による東京南部のサークルをはじめ、宇野田尚哉の在日朝鮮人のサークル運動や川口隆行による被爆地広島のサークル運動など、一九五〇年代に全国各地で同時多発的に発生したサークル運動の軌跡が本著によって明らかにされた。この研究会の性格として、道場は川口の次の言葉を引用している。「それぞれの「現場」をもつ者による自由で忌憚のない対話、拘留の実践にほかならず、新たなつながりを生み出そうとする「現場」そのものである。」[1]このように、一九五〇年代におけるサークル文化運動研究が様々な「現場」で一定の蓄積を見せるなか、被差別部落という「現場」におけるサークル文化運動については未だ議論が深められていない現状にあると言える。

また、従来の被差別部落をめぐる研究では、社会運動全般の中での部落解放運動を対象とした経験社会学的研究や、部落史あるいは部落解放運動史といった、歴史学的研究に関するものに力点が置かれてきたと言える。文学研究の領域においても、文学史という枠組みでは豊富に蓄積がなされているが、そこに描かれている表現については、もっぱら部落解放運動とは別個の問題として見なされ、表現と運動の相関関係についてはあまり考慮せずに議論されてきたと言える。

そこで、本稿では、サークル文化運動における一つの「現場」としての被差別部落のサークル文化運動についての先行研究を概観する。そして、そこに現れた一人の特異な表現者であり運動家の、土方鉄という人物について検討していくことを通して、表現と運動がどのように関わり合っているのかを分析していく。

川口隆行は、原爆体験における表現と運動の関わりを次のように指摘している。

> 被爆者救済運動、在韓被爆者支援、ベトナム反戦運動、証言・継承運動、あるいは読書サークルの組織化といった様々な〈運動〉と結びつき、時には背離もする〈表現〉は、既存の制度や法が不可視化してきた領域を切り開き、あるいは新たに別の死角を生み出し、体験の継承あるいは思想化といった問題とも不可分であった。〈運動〉としての〈表現〉、〈表現〉としての〈運動〉とも呼ぶべき、〈表現〉と〈運動〉の内実を深く理解するためにこそ、両者のあいだをうご

めく出来事の把握が不可欠ではないかということなのだ。[2]

ここで、川口が指摘しているように、社会運動は原爆体験のみならず、被差別部落における差別体験の表現と部落解放運動の問題にも当てはまると考えられるだろう。サークル文化運動が盛り上がりを見せる一九五〇年代前半、部落解放運動もまた、一九五一年に京都で巻き起こったオールロマンス闘争によって、個人への糾弾から行政への糾弾という新たなステージへと運動が押し進められていった。そういった運動渦中で、被差別部落出身者による表現が全くなかったわけではない。そこにはどのような表現があったのか、そして、その表現が運動のどういった部分を「可視化」し、あるいは「死角」を生み出したのか。それらを追及すべく本稿で注目するのが、土方鉄という人物なのである。

## 二　先行研究

本節では、土方鉄の詳細を議論する前に、まず被差別部落におけるサークル文化運動の「現場」を確認する。管見の限り、被差別部落におけるサークル文化運動についての論考として、黒川伊織の論考[3]のみが挙げられる。黒川は、一九五〇年代に群馬県で活動していた被差別部落出身の詩人・酒井真右が編纂し、一九五二年一一月に発行された部落解放詩集『地ぞこからのうたごえ』を取り上げ、そこに詠みこまれている「部落民の表現」を紹介している。

黒川は、本詩集の発行所が「全国部落解放委員会群馬県連合会」となっているが、実際は酒井の自宅に置かれており、酒井がひとりで発行を取り仕切っていたと言う。酒井真右という人物について、簡単に略歴を記すと、一九一八年埼玉県の被差別部落に生まれ、旧制中学校を卒業後、一九三七年軍隊に入隊、一九四〇年除隊し、同年法政大学に入るもすぐに中退し、一九四一年宮城師範学校に入学、同年暮れに治安維持法違反容疑で憲兵隊に検挙される。一九四二年に初等科を卒業し教員となるが、敗戦と同時に共産党の活動に専念していたため、一九四九年レッド・パージにより教職を追われる事となる。その後、群馬を拠点に「群馬勤労者集団サークル」、「新日本文学会」に所属し、「人民文学」全国編纂委員を務める。表現活動の場では、『新日本詩人』、『群馬文学』などに自らの戦争体験やレッド・パージの経験を題材にした詩作を発表しながら、朝鮮人作家・金達寿らが関わった『民主朝鮮』に詩を寄せ朝鮮人運動と親しい関係にあった彼は、朝鮮人詩人・許南麒の『朝鮮冬物語』(朝日書房、一九四九)を踏まえて一九五三年に自身の詩集『日本部落冬物語』を刊行する。サークル詩人としての詩業としては幼馴染の戦死をうたった「写真」(『新日本詩人』一九五〇年九月号)が『日本ヒューマニズム詩集』(三一書房、一九五二年)や『祖国の砂―日本無名詩集』(筑摩書房、一九五二年)など当時のサークル詩運動の佳作を編んだアンソロジーに収められ、酒井の名は全国に知れわたる事となる[4]。また、酒井自身が主宰した詩サークル・群馬勤労者集団は、サークル詩誌『土と鉄』を発行し、五〇年代サークル詩運動を担う有名サークルとしてその地位を確立していく事となる。

『土と鉄』は中央誌である『人民文学』一九五二年二月発行のサカイトクゾー「詩サークル運動の発展」によって初めて紹介され、AとBの談話体で語られるその紹介では「日本一汚い」印刷、「商売往来のあらゆる人々がかいていて、じつにおもしろい」、「全国的になつて転載また転載がはじまる」といった特徴が述べられている。また、この『土と鉄』に関して、鳥羽耕史は「特異なサークル誌」であると言う[5]。鳥羽が『土と鉄』に見出している特徴の一つとして、その評価が、なによりもまず無名性、匿名性に対してなされていた、という点が挙げられている。こ

のことに関して、鳥羽はコンピュータのフリーソフトウェアに関する、リチャード・ストールマンの著作権（copyright）をもじって名付けた「copyleft」[6]という思想に近いと指摘し、次のように言う。

雑誌から雑誌へと自由に流通する詩は、いつしかその作者も忘れられ、テクストのみが愛唱される。その際、サークル誌が「日本一汚い」ような手作りのガリ版であったことは重要である。製版のために鉄筆で書き写される度にいわばエクリチュールの現場が再体験され、書き写す者が作者性を帯びることになるからだ。（中略＝論者）生原稿が中央の出版社に集められ、活字に組まれて大量印刷され、地方に配信されるのではなく、共同性を帯びたサークルの集団によって小規模な出版のネットワークが結ばれること。引用を含む製版の度にエクリチュールの現場が再体験され作者性が多数性の中に溶解していくこと。戦後ガリ版文化が生んだサークル誌ネットワークには、それ以前ともそれ以後とも異なる共同的な文学の場が内包されていた。

このような特徴を兼ね備えたサークル誌を牽引する酒井は、『人民文学』を介して当時部落解放全国委員会の中央委員を務めていた作家・野間宏と出会い、野間が部落問題をサークル誌運動につきつけようとしていた流れに乗る形で、部落民による詩や俳句・短歌を集め『地ぞこからのうたごえ』を発行するにいたった。

鳥羽がサークル誌ネットワークの可能性を、前述したような、転載によるテクストの流通に見出しているように、『地ぞこからのうたごえ』においても、数々の作品が他の媒体へと転載される経緯をたどる。『部落』一九五一年一二月号には長井三郎「一足の足袋」、岡田ます枝「重たいふとん」の二作品が、『部落』一九五三年二月号には「解放のうたごえ」という見出しで吉川栄子「しあわせがほしい」や青木みどり「部落の仕事」など九作品が『地ぞこからのうたごえ』から転載されている。

また、『解放新聞』一九五三年一月一日付の記事には「子どもたちの世界」という見出しで泉君子「けんか」、岡田隆男「本当のことを教えてください」の二作品が転載されるとともに、「詩集「地底からのうたごえ」を發刊…群馬で…」という見出しで、本詩集が宣伝されている。

次に、『地ぞこからのうたごえ』の書き手に関して見ていく。小学六年女児一名、中学三年女児一名、中学三年男児三名、成人女性一一名、成人男性七名の二三名の人々で、京都の土方鉄、土方峰（論者は作品内容から土方鉄と同一人物なのではないかと考えているが、黒川は分けて数えているため、黒川の計数に則る）、埼玉の村田一夫の三名を除くと、その他の書き手はみな群馬県の被差別部落に暮らす人々である。黒川はこの書き手に関して、一〇代後半から二〇代の若い女性が半数以上を占めている事が特徴であるという。当時のサークル詩運動のなかで女性詩人の活動はあったが、評価されなかったのに対し、本詩集では女性詩人の活躍が目立つ。この点に関しては、鳥羽が指摘した匿名性、無名性にも関わってくることであるが、部落出身者の中でも、特に女性という立ち位置に着目する黒川は、彼女らの作品を「日常に深く刻み込まれた差別を題材としながら部落差別を静かに告発して、読み手の胸を打つ」と評価している。また、女性詩人の中でもとりわけ黒川が注目しているのは、黒川自身がこの詩集を知るきっかけとなった青木みどりの「部落の仕事」と、転載の観点から幅広く注目されることとなる岡田ます枝の「重たいふとん」の二作品である。

前者に関しては、『地ぞこからのうたごえ』に発表された後、『部落』誌に転載され、『部落の現状（講座部落Ⅲ）』（部落問題研究所、一九六〇）

に収録される。後者に関しては、『地ぞこからのうたごえ』に発表後、同じく『部落』誌に転載され、『地ぞこからのうたごえ』に続く第二弾のアンソロジーの題名として決定していたことからも、酒井がこの詩を高く評価している事がわかる。こういったいきさつから、第二弾が刊行されることが期待されたが、実際に刊行されることはなく、その後の部落民によるサークル詩運動は持続的に展開される様子はない。このことについて黒川は、次のように述べている。

『地ぞこからのうたごえ』に続く第二の部落解放詩集として企画された『重たいふとん』も、野間宏の協力のもと生活記録のアンソロジーとして企画された『部落に生きる子』も、刊行されないままに終わったように、部落でサークル詩運動を持続的に展開していくことは難しかったようだ。その最も大きな理由は、識字の問題であっただろう。（中略＝論者）五〇年代の部落においては、詩を書く以前に、文字を学べなかった人々に学びの機会を提供することの方が、早急に取り組まれねばならない課題だったのであり、自由に詩を書くことのできた部落民の数はそう多くはなかったのだ。（中略＝論者）詩や生活記録が衰退する一方、部落の文化活動の中心となったのは、幻灯やうたごえ運動など、よりわかりやすい娯楽だった。

部落解放運動における文化活動が「書く」という表現行為から「観る」、「歌う」という表現行為によるものにとって代わられていくことがここでは指摘されている。

## 三　運動家としての表現

黒川はまた、女性詩人たちの詠む詩とは「正反対の立場」となる表現が酒井や土方ら男性詩人の詩にはあり、それらの数々が「共産党の「五一年綱領」に忠実なアジテーション詩」であると指摘する。そこで取り上げられているのが土方鉄の詩「おつさん」であり、黒川は次のように言及している。

「ヨシダ」はもちろん吉田茂、「取られてしもうた」富士山は米軍演習場の存在を指している。後半で「市役所えどなりこんだろうやないか」と行政闘争を鼓舞している背景には、オールロマンス闘争を経た京都の部落解放運動の経験があるかもしれない。それにしても「重たいふとん」と比べると、「おつさん」は当時の土方の立場性を反映してあまりにも政治的に過ぎる。実際、当時のサークル詩運動は「おつさん」のようなアジテーション詩を無数に生み出したのだが、しかし、部落差別の解消を日本革命の帰趨に還元するこのようなアジテーションが現実の部落解放運動に有効であったのかは、また別の問題である。

一九五一年一〇月のオールロマンス闘争によって、部落解放運動が行政闘争へと転換したことからも、黒川の指摘は了解できる。また、他の男性詩人の詩作について見ていくと、長井三郎の「一足の足袋」という詩では、税金の使途が「バズーカー砲になるだろー」と揶揄され、さらに「何の役にも立たない」といった朝鮮戦争下における政府への批判が表現されており、吉村金之助「血を吸う奴」では最終学歴が小学校の父を奴隷のように働かせる上流階級の人間に向けた怒りが表現されている。また、田島次郎の詩には、直接的な天皇批判がなされているものがある。しかし、これらの詩作は部落民としての自らの厳しい立場や部落の現状を表現することに主眼が置かれている。これらの詩作に比べるとやはり

土方の「おつさん」は政治的な色合いが濃いと言えるだろう。

また、土方鉄のまた別の作品「愛する人々よ」では、「おつさん」よりも強烈なアジテーション詩としての印象を抱かせる。特に「差別を助長させている売国政治」、「その背後の巨大なケモノども」といういささか陳腐な寓喩を用いて、それらに対しての怒りや憎しみを詠っている点や、「寐むれる人よ　起きろ！／うづくまれる人よ　立て！／百姓も／労仂者も／日雇も／貧しいものみんなみんな集れ！」といったように掻き立て、「わが愛する人々よ／もえたぎる　怒りの焔を／きやつらに　ぶちあてろ／きやつらを　焼きつくせ！」といった、たたみかけるような表現が挙げられよう。部落の人々だけでなく、農民や労働者に対しても呼びかけるこの詩は、部落差別というよりも、当時の政治に対する反抗の詩としての側面がより強調されている。他の男性詩人よりも政治色が強くなる要因としては、土方が当時の解放運動の中心的な位置でもあった京都府連に所属していたことにより、その立場性の問題が全面的に出たからだと言えるだろう。黒川が「部落差別の解消を日本革命の帰趨に還元するこのようなアジテーションが現実の部落解放運動に有効であったのかは、また別の問題である」と指摘しているように、当時の共産党綱領の絶対性、言い換えるなら、反米闘争が先鋭化するなかで、部落の解放は日本革命とともにあるという問題を抱えていた。つまり、反米闘争のための部落解放運動という運動の序列化が起こっていたのである。その言説に飲みこまれ、部落における代表的な詩人であった酒井の影響力も加わって、土方がアジテーション詩を詠み、それをまた読者が読むという作用が働いていたことが指摘しうるだろう。

ここでの黒川の問題提起を引き受けると、次のような二点の問題が挙げられる。一点目、一九五三年九月一五日に発行された『解放新聞』には、水害復興闘争における部落の生活改善の要求が「水害復旧のたゝかいは、日本を破めつさせる再軍備と軍需産業をやめさせて、平和産業を発展させ、失業と貧乏をなくさせるたゝかいであり、アメリカと国内反動の圧迫と支配なくして、部落解放を実現させるたゝかいである」と反米、反政府闘争として大々的に報じられた点。二点目、黒川みどり[7]が『解放新聞』一九五五年五月二五日に掲載された、部落解放全国委員会岡山県連合会の支えで開催された日本母親大会に関する記事を取り上げて、「差別と貧乏においこまれた母親の切実な悩み」が吐露されている文章のあとに、「また」という接続詞で繋げて、「おそろしい原子戦争の準備に反対する署名活動に参加することをきめました」と報じられることで、部落の女性たちの運動が「平和を守る」という革新政党の政治的スローガンの中に封じ込まれてしまったと指摘している点。以上の二点から浮かび上がったのは、部落における水害復旧闘争や部落の女性たちの積極的な運動が、反戦平和運動に絡めとられることによって、彼ら、彼女らの本来の声が届かなくなっていた、という問題であろう。

このように、運動における様々な問題が絡み合う中で、土方の共産党アジテーターという立場性、そして、運動家としての表現がここでは浮き彫りになった。一九五二年当時、部落解放全国委員会京都府連で専従をしていた彼が、群馬で発行された詩集に詩を寄稿することには並々ならぬ表現への追究があったと言える。

では、彼の詳細について見る。

## 四　土方鉄について

土方鉄（本名・藤川正美）は、一九二七年一月、京都市伏見区竹田狩賀町の被差別部落に生まれた。父は靴職人、母は内職の鹿の子絞りをしているが不安定な収入により貧しい家庭で育ったため、小学校六年間を卒業の後、鉄工所を転々としながら働き、一五歳で夜間中学に通いだす

が、その年の夏に肺結核を患い入院する。以後一〇年間の療養生活を余儀なくされ、療養所生活中の一九四七年に元傷痍軍人療養所である国立京都療養所に入所し、京大結核研究所で肋膜外合成樹脂充填術という手術を受け、肋骨を九本切除している。一九四九年に療養所内にて日本共産党に入党し、療養期間中に俳句や詩の創作活動を行う傍ら、京都文学サークル協議会など、いくつかの文学サークル運動に参加し、一九五二年に療養所を退所する。療養所退所後、部落解放運動に参加、一九五三年から部落解放全国委員会京都府連合会で専従として活動し、一九五六年から小説の執筆を始め、一九六三年『地下茎』で第三回新日本文学賞を受賞する。一九六四年に日本共産党から除名されている。一九七一年には右甲状腺腫瘍の摘出手術を受け、一九八一年には甲状腺全摘、声帯の神経一部摘出、右リンパ腺摘出、気管切開という大手術を受ける。この期間における入院生活の体験を題材にした小説『妣の闇』を一九八七年に執筆し、晩年は俳句の創作を再開、自身の第二句集『句集漂流』を一九九六年執筆した。これらの創作活動の傍ら、一九七四年から一九九〇年まで『解放新聞』編集長を務める。一九七〇年代には狭山事件の真相を広めるために戯曲や映画脚本を執筆、狭山事件と裁判の内実や経過を世論に訴えた。一九七四年に部落解放文学賞が創設されて以来三〇年間、実行委員・選考委員などとして同賞の活動を推進し、一九九六年から同賞実行委員会代表となる。その後、二〇〇五年二月に死去する。

この経歴を見れば、土方鉄が本格的に部落解放運動に関わり始めた一九五二年から二〇〇五年までという期間、すなわち戦後部落解放運動の出発点、六〇年代から七〇年代にかけての高揚、八〇年代以降の運動内部の分裂による問題の複雑化や同和対策特別措置法の推進による住環境改善が及ぼした部落の実態の不可視化、他のマイノリティや反差別運動とともに「人権一般」[8]という枠へのなだれ込みによる部落問題認識の希薄化という時代に、戦後の部落解放運動を担う重要なポストにいた人物であることは明白であろう。ただし、本稿では彼が本格的に運動に参入し始めた一九五〇年代前半を中心に扱うため、それ以降の彼の表現と部落解放運動の関わりについては、別稿を用意したい。

では、なぜ土方を取り上げる必要があるのか。それは、被差別部落出身である彼が、サークル文化運動という場で表現活動を行っていることと、同時並行的に異なる性格の表現を異なる場で展開していたことにある。『地ぞこからのうたごえ』では共産党のアジテーターとしての表現を見せた。しかし、『地ぞこからのうたごえ』において、黒川が「部落差別を静かに告発して、読み手の胸を打つ」と評価した女性詩人のような表現も、「結核療養者」としての表現もまた垣間見せるのである。

土方は一九四二年に結核を罹患し、一九五二年まで結核療養のため療養所に入所していた。その期間に、療養所の図書館で文学作品に触れるとともに、当時の全国的に拡大していた療養所サークルの活動に参加、表現活動を開始している。療養所サークル運動は、『「サークルの時代」を読む　戦後文化運動研究への招待』コラム９で有薗真代が「各地の療養所で詩をつくる動きが活発化し、無数のサークル誌が編まれ」るとともに、その「サークル誌は、ひとつの療養所内で読まれるだけでなく、周辺地域の住民や、遠く離れたほかの療養所まで届けられることもあった」[9]と言及するように、大きな盛り上がりを見せていた。そういった機運の中で、土方は京都文学サークル協議会、方向俳句会の協力を得てガリ刷りの『土方鉄句集　よき日のために』（以下『句集』）を一九五四年一一月一日に刊行した。この『句集』が刊行されたのは一九五四年であるが、『句集』あとがきによると句の創作は一九四七年から一九五三年になされていることがわかる。つまり、『地ぞこからのうたごえ』に詩を寄稿する前後の創作である。

そこで表現されている内容について次節で見ていく。

## 五　療養者としての表現

『句集』の構成は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの三章仕立てで、Ⅰ：四五句、Ⅱ：二七句、Ⅲ：四六句の計一一八句となっている。大まかな特徴を述べると、まず文語と口語の割合では、文語体の数がⅠ：二〇句、Ⅱ：五句、Ⅲ：四句といったように減少していくのに対し、口語体の数はⅠ：二五句、Ⅱ：二四句、Ⅲ：四二句というように増加していく。また、定型句と自由律俳句（ここでの自由律俳句には多行形式の句も含めている）の割合に関しては、定型句がⅠ：四一句、Ⅱ：一四句、Ⅲ：五句と減少傾向にあるのに対し、自由律俳句の数はⅠ：四句、Ⅱ：一三句、Ⅲ：四一句といったように増加していくという特徴を読みとることができる。また、Ⅲでは三行句や四行句といった多行俳句が四六句中、四一句となっており、そのほとんどを占めている。形式の観点から見ると、かなり実験的な創作がなされていることがわかるだろう。

また、土方が詠んだ句における具体的な技法を取り上げると、富澤赤黄男が追究した「字間空け」と、富澤に師事した高柳重信による「多行俳句」である。例を挙げると次のような句がある。

喀いても血　友らビラをはってるか　（Ⅱ）

秋風　肺の奥でもひびいている　（Ⅱ）

横たわる
せまく
つめたい手術台　（Ⅲ）

このような表現方法の変化について、土方自身、後年次のように語っている。

当時、すでに波郷の『胸形変』と『借命』の二句集は、刊行されていた。わたしは療養所で、患者仲間から、俳句の手ほどきをうけた。最初から保守的な写生俳句は学ばなかった。なにしろいろんな人が、多様な俳句グループにはいっていたからだ。山口誓子をはじめ『天狼』の人びとの作品をほめる人がおれば、高柳重信や富澤赤黄男の前衛的な俳句を、もちあげる人びともいるという具合。その双方から影響をうけながら、自分の俳句を創ろうと、企てる人もいた。（中略＝論者）いずれにしても、療養所で療養俳人にもまれたこと、『借命』のもつ波郷の眼光によってわたしの俳句の基礎は、つくられたといっていい。[10]

ここで、注目すべきは結核療養者であった土方の「俳句の基礎」が、石田波郷の句作によってできあがっているという点であろう。そのことを示すように、次のような句の相似が見られる。

土方：鵙が鳴くたびに頭が空ラになる（Ⅰ）
波郷：たばしるや鵙叫喚す胸形変　（『借命』）

土方：初蝶や病衣脱がざること久し　（Ⅰ）
波郷：初蝶や吾が三十の袖袂　（『風切』）[11]

一つ目の比較では「鵙」という季語、そして鵙が「鳴く」というモチーフが共通し、二つ目の比較では「初蝶や」という発句が共通しているこ

とから、その影響力の大きさが計り知られる。こういった波郷との共通点は、単語レベルでは止まらない。俳句形式についても同様である。俳人の長谷川櫂は波郷の句の形式を「超絶形式」と呼び、その特徴について次のように評している。

> 波郷の句には誰の目にも明らかな型の上での著しい特徴がある。まず上五をがっしりと据え、続く中七・下五は一気呵成に詠み下す。当然の結果として上五と中七・下五の間には恐るべき切れが生じる。（中略＝論者）まず上五を据え、後は一気に詠み下すこの型は、しばしば上五に置かれる季語をいっそう凝縮し、生き生きと働かせるとともに中七・下五での作者の自由な展開を許す。[12]

では、土方の『句集』における次の句を見てみよう。

初蝶や病衣脱がざること久し　（Ⅰ）
雪晴れや死者の病衣が干されたり（Ⅰ）
運ばれゆく屍の洗いざらしの足袋（Ⅰ）
手術前石炭こぼしつつ投げ込む　（Ⅰ）

これらの句もまた長谷川の指摘する波郷の「超絶形式」と同じ構成で詠まれていることがわかるだろう。特に「初蝶や」、「雪晴れや」の句については、上五の切れ字に「や」が用いられていること、中七と下五のつながりが、「初蝶や～」の句では句またがり、「雪晴れや～」の句では主述の関係として詠まれていることが共通性として指摘できる。また、『句集』における「超絶形式」はⅠでのみ用いられている技法であることから、土方にとっての俳句創作の基盤として石田波郷の「療養俳句」があったと読み解くことができるだろう。

また、形式だけではない土方と波郷の共通性として私小説性が挙げられる。前掲した「初蝶や吾が三十の袖袂」の句における「吾」に示されるように、波郷の作品群はそのほとんどが作品と作者が一体化しているとも言えるものである。これは、高柳の句では「作者の影が作品の中に直接的に投影されないように、むしろそれを回避しながら仮構されている」[13]こととは対照的な点であるとともに、形式上は高柳の多行形式を取り入れながらも詠まれる内容は波郷のような写実主義的な側面を持つという、ある意味土方の「独自性」であると言える。

こういった「療養」に関する俳句が『句集』では最も多く詠まれているのだが、そのほかにも「労働」や「部落」という主題を詠んだ句も創作されている。特に次の俳句が挙げられる。

路次口も夕焼けて来て犬の糞（Ⅰ）
子ら風の子といわれ露地口でメンコ（Ⅰ）
靴屋が靴たたく咳をしてはたたく（Ⅰ）

ここで詠まれている部落の「路次（露地）口」の風景には、後に『岬』で戦後生まれ初の芥川賞を受賞する中上健次が表象した「路地」を彷彿とさせるような部落の実態や、人々が描き出されていると言える。また、これらの句作で興味深いのは、これらの作品が俳句としてではなく「露地口風景」という題の詩という扱いで、一九五一年六月号の『部落』誌に「ふじかわ・まさみ」名で掲載されていることである。詩としてつなげていた一つの作品を、俳句として分けることによって、一つ一つの風景や人物がより印象強く読み取れる。そういった詩を俳句に分割した例はこれだけではなく、一九五一年七月号『部落』誌には「靴工の歌」と

いう題で、『句集』では三行句の俳句四句が一つの詩として掲載され、一九五二年一月一〇日『解放新聞』に「ふじかわまさみ」名で「爆音／ぎしぎしと鳴る／木のベッド」など三句が掲載されている。こういった様々な媒体で表現されていた土方の詩や俳句が解体され、再構築されて『句集』は成り立っていると言える。そこで詠みこまれているのは、共産党のアジテーションとは異なる「療養」や「部落」を主題とする俳句や詩なのである。

## 五　表現の差異

これまでの分析を通して、『地ぞこからのうたごえ』における詩の表現内容と、『句集』における俳句の表現内容には明確な差異があることがわかった。前者では、高揚する終戦直後の平和運動や部落解放運動に乗っかりながら、あるいは巻き込まれながら共産党のアジテーション詩の創作を行うという表現の変容の様が読み取ることができる。一九四七年から一九五三年という六年間で形式、内容ともに多大な変化を見せ、その根幹には自身の病気療養、部落や部落民の貧困、占領下の情景などを記録的にありのまま表現することに徹する姿勢が読みとられる。

ただし、『句集』で詠まれた俳句と、寄稿された詩の内容がきっぱりと乖離しているわけではないことは注意すべき点である。『句集』では、平和運動や労働運動、当時の情景を詠んだ句だけではなく、療養所を退所した土方が部落解放運動に本格的に参入していくことで、詩に詠まれていたような政治色の強い句も登場するようになる。当時の土方にとって政治的表現は重要なテーマであり、内的な必然性を伴ったであろうことは言うまでもないが、『句集』と詩を並置して読み比べると、一人の表現者が運動の影響下に置かれることによって、生み出される表現が揺れている様相が見て取れる。

そして、詩との読み比べによって『句集』から読み取れるもう一つの重要なことは、一人の表現者としての土方の態度であろう。高柳重信が「多行形式」俳句を一九五〇年八月に第一句集『蕗子』（東京太陽系社）で初めて表現し、続く一九五二年にはその表現をさらに発展させた第二句集『伯爵領』を上梓した。両作品とも、富澤赤黄男の『蛇の笛』同様、土方の『句集』創作時期と重なっており、石田波郷の『胸形変』や『借命』だけではなく、富澤や高柳の作品からも多大な影響を受けたことは間違いない。ただし、ここで注意すべきなのは、一つの句集内でこれほどまでに形式を変化させている点である。そこには、一人の表現者として「書く」ことを追究する姿勢が色濃く反映されている。定型俳句による表現の限界だ、という見方もできるが、それ以上にこの『句集』からは「定型・一七音・一行書き」には収めきれない土方の強い問題意識を拾い上げることが重要になるだろう。なぜなら、この『句集』が土方にとってまとまった形で上梓した創作の原点であり、そこから読み取れる彼の強い問題意識の根底には、様々な人々の影響下にありながらも、「書く」ことによって自己を表現しようともがく姿勢が浮き彫りになっているからである。

こういった急速な表現方法の変化が富沢や高柳からもたらされる一方で、そこで詠まれる俳句の内容は、これまで概観してきたように「療養」や「部落」、「貧困」といった主題を波郷の志した「素朴なリアリズム」という方法で表現される。療養所から退所した土方を待ち受けていた部落解放運動、反戦平和運動といった大きな流れに巻き込まれながら、「療養」と「運動」の入り混じる次のような句が詠まれていく。

喀いても血　友らビラをはってるか（II）

あばらなき骨が重くてビラ刷り止む（Ⅲ）

病む手から
手へ
反戦ビラの蝶（Ⅲ）

特に三句目に挙げた三行句による「反戦ビラの蝶」は、峠三吉の『原爆詩集』における「一九五〇年の八月六日」において詠まれた「一斉に見上るデパートの／五階の窓　六階の窓から／ひらひら／ひらひら／夏雲をバックに／蔭になり　陽に光り／無数のビラが舞い」という描写を受けての表現であろうと思われる。しかし、その「ビラ」が結核を患った土方自身、あるいは患者たちの「病む手から手へ」橋渡しされている光景は、まさにこの当時の土方自身を表現していると言えるだろう。

## 六　おわりに

本稿では、一九五〇年代に盛んに取り組まれたサークル文化運動における一つの「現場」としての被差別部落を、土方鉄という人物の表現、および表現に向かう姿勢に焦点を当てて考察してきた。彼が療養所サークルで開始した「療養者」としての表現や、それまでの部落での生活を眼差す「部落民」としての表現は、部落解放運動、あるいは反戦平和運動との交わりによって「共産党のアジテーター」としての表現を生み出す事となった。このような一人の表現者の表現が（本人の意図的な表現の切り替えも踏まえねばならないが）運動によって変容する瞬間が垣間見えたのではないだろうか。

被差別部落におけるサークル文化運動は黒川が指摘したように、この後「書く」という表現行為から、「観る」「歌う」という表現行為にシフトしていく。だが、それでも「書く」ことによって自己を表現しようとした部落民の連帯の姿が、『部落』誌や『解放新聞』などの全国誌と『地ぞこからのうたごえ』などのサークル誌における土方と酒井の交流から見えてくる。その例として、一九五一年六月号の『部落』誌には土方の「露地口風景」という詩が掲載された下の欄に『地ぞこからのうたごえ』を編纂した酒井真右の「おれたちわ人間だ」という詩が掲載され、一九五一年五月一〇日の『解放新聞』には土方の俳句が掲載された隣の「文化」欄に、同じく酒井の詩「四本指」が掲載されていることなどを踏まえると、『地ぞこからのうたごえ』への土方の参入がこういったネットワークの構築から果たされたと考えることが挙げられるだろう。しかし、これだけでは部落でのサークル文化運動が連帯していたと断言できない。より多くの資料収集が望まれる。

---

註

1 『「サークルの時代」を読む　戦後文化運動研究への招待』（二〇一六・一二・二七、影書房、二七九頁）

2 川口隆行「原爆体験の〈表現〉と〈運動〉を問うこと」（『原爆文学研究』第一三号、二〇一四・一二・二一）

3 黒川伊織「一九五〇年代のサークル詩活動と部落民の表現」―酒井真右と部落解放詩集『地ぞこからのうたごえ』―」（『京都部落問題研究資料センター通信』、二〇一四、四・二五）

4 この点に関して、鳥羽耕史『一九五〇年代―「記録」の時代―』（河出書房新社、二〇一〇年）によると「一九五〇年代前半、各地で叢生したサークル誌は、互いに雑誌を交換し合い、また『人民文学』や『新日本文学』といった、いわゆる「中央誌」に送ることでその存在を主張した。各地のサークルを結ぶ働きをした「中央誌」の側では優秀な詩を転載し、また詩集を編むことで、こうした運動を可視化していった。」とある。（二一頁）

5 鳥羽耕史「サークル誌ネットワークの可能性―『人民文学』と『新日本文学』から見る戦後ガリ版文化―」（『昭和文学研究』二〇〇六・三）

6 「コピーレフト(Copyleft)」とは、著作権者が著作物の自由な利用、複製、改変を認め、さらにその派生物の再配布についても制限のない利用を守るよう求める権利のこと。または、その推進運動。実際には、コンピュータソフトウェアを対象にしており、コピーレフトの例には、オープンソースやフリーソフトウェアがある。(『図書館情報学用語辞典 第4版』丸善出版、二〇一三・一二・二五より)

7 寺木伸明・黒川みどり『入門　被差別部落の歴史』(解放出版社、二〇一六・五・二五)二五三～二五四頁

8 ここでの「人権一般」とは黒川みどり『創られた「人種」――部落差別と人種主義(レイシズム)――』(有志舎、二〇一六・三・一)における、一九七〇年代以降の部落問題についての認識を参考にした。

9 有薗真代「生存権、コミューン、そして詩――一九五〇年代の療養所サークル」(『「サークルの時代」を読む　戦後文化運動研究への招待』コラム9所収、引用部は二四五頁)

10 土方鉄『小説　石田波郷』(解放出版社、二〇〇一、三・三〇)二八六～二八七頁

11 波郷の句は『石田波郷全集　第一巻俳句一』(角川書店、一九七〇・一一・三〇)および『石田波郷全集　第二巻俳句二』(角川書店、一九七一・二・二七)より引用

12 長谷川櫂　「夜の風鈴―石田波郷論」(『俳句』一九九四、一〇)

13 堀切実「「多行形式俳句」という挑戦：高柳重信論」(『連歌俳諧研究』一二八号、二〇一五・三)

(徳島県吉野川市立山瀬小学校)